

# 少年時代

陶 易 王



少年はお寺のほうから聞こえる祭り太鼓の音に、そわそわと落ち着かない気分だった。

お寺の境内でサーカスが開かれるとも聞いた。「麗しき天然」の曲が流れて来る。

机に向かって英文翻訳の仕事をしている母を横目に見ながら、連れてつてくれるといいなと思っっていると、近くのお邸でお手伝いさんをしている瑞江ちゃんが、本を届けて来た。サーカスの話をすると、

「いいわ、私、今晩暇だから、坊ちゃんをお祭りに連れてつてあげようか」と言う。

母はあまり歓迎しない顔だったが、引き出しからお金を出して瑞江ちゃんに渡し、「済みません、お願いします。私は一寸仕事が終わらないので」と笑顔で頼んだ。

少年は天にも昇る気持ちが出て、瑞枝ちゃんと手をつないで、お寺の境内に向かった。

そこにはもう縁日の屋台がずらりと並びセルロイドのお面や、玩具、棒飴などを売っていた。

その前を素通りしてサーカスのテントに入る。中は熱気でむんむんしている。

# 医芸俳壇



一月尽八十路の画家と話しけり

冬日和安芸島巡り一日終ゆ

牡蛎食べて広島に居る平和かな

春時雨会話途絶えし通夜の路

花見して靖国神社で歌ひけり

末っ子の小さき止坐羅祭

白を彫る手斧一つや頬被り

晴れてなほ明日を煩ふ雪暮らし

鉄瓶の湯気やはらかや春隣

春炬燵背骨抜かれてしまひけり

千葉 秋葉 琢磨

青森 朝霧 朝光

狭い板の座席に座って見ていると、ライオンの火の輪くぐりや、熊の玉乗りなど、それ程珍しくなかったが空中ブランコや、アクロバットには息をのんだ。少年は好奇心の塊である。20歳の若い瑞枝ちゃんに、次々と質問を浴びせかけた。

「ねえ、あの子の身体はどうなっているの？ どうして背骨があんなに曲がるの？」

彼女は周囲を見回し、少年の耳に唇をつけて小さな声で、恐ろしい事を囁いた。

「人攫いが子供をさらって毎日、骨が軟らかくなるまでお酢をコップで何杯も飲ませる。骨が軟らかくなって自由に骨が曲がる様になつたら、その子供をサーカ

スに売って、アクロバットの芸を仕込むの。坊ちゃんも勉強しないで遊んでばかりいると、人攫いに捕まってサーカスに売られちゃ、うから」

絵本で見たピノキオがサーカスに売られる話は本当だったのか。急に恐ろしくなつて瑞枝ちゃんにしがみつくと、彼女もぎゅっと、抱きしめてくれた。彼女の胸は柔らかく、仄かに香水が匂つた。

夜は柔しい事が沢山あつて、中々眠れなかつた。

お酢を飲むと骨が軟らかになると言つ固定観念が脳裏にしみこんで、少年は大人になつても酸っぱい物が食べられなかつた。

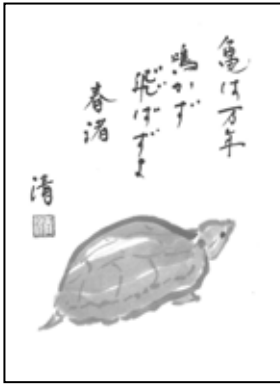
(了)

長野 有泉 七種

春雪の音きよらかに解けゆけり  
をさな児の歩み確かに春立てり  
春風にゆだねて歩ゆむ故郷かな  
白梅の香の地に沈む夜の雨  
畑土のふんわりと凍て解けにけり

浜松 岩本 漂人

照り映える水面はオシの群包む  
よき枝にノスリ止りぬ冬夕焼  
オオハンやげんこつ程の黒き群  
初詣イカルが招く奥の院  
植込みのアオジを待てり着ぶくれて



東京 福富 清子

東京 小南 丁字

立ち寄れば「三四郎池」の冬籠  
緋鯉だけ際立つ池の薄氷  
夕照の三日月太陽冬の海  
埋め尽くす名園枯芝雪景色  
春風改革理事会へ貴一步

東京 篠田 那伽

妻の忌や古都の老舗に時代雑  
バレンタインの謂れ識らずに卒寿越ゆ  
春立ちぬ早くも総会準備とや  
店長以下挨拶丁重松の内  
盆梅は葬儀屋からと孫笑ふ

東京 田村 豊幸

散歩して雪中顔に降りかかり  
春の雨妻の久すゆで眼に目白  
雪筑波ここより見ると真岡から  
アンメルツ指にすりつけ俳句かく  
一階まで寒いがリハヒリそのつもり

新潟 中村 雄彦

新年の笑顔に大きな複製  
新築の洋間に揺るる餅の花  
長旅の曆忘れて浮き寝鳥  
生き返る寺の仁王の煤払い  
軒下に来てゆつくりと雪払う

長野 榎本 勝彦

初劇の船弁慶や数珠たかし元し  
鉄山の像に吹雪きぬ大守閣  
紙細工下ムあでやか寒に成る  
湯中ゆあたりや欲得失せて寒暄し  
びよびよと卒寿に病みて春を待つ

東京 初芝 澄雄

小松川千本桜花盛り  
荒川の堤を行けば春つらら  
純白の木蓮の花空高く  
花オオウ紅紫に咲き誇る  
梅の美の目につくよつな候となる

兵庫 廣辻 逸郎

潮騒が春の息吹を運び来る

洞門をくぐり花満つ石畳

山染める寒緋桜や戦跡

順序ある四股名職や春の風

青春のおもひ濃き人さくら咲く

青森 福士 盛大

春めきて柔らかな風服に入る

亡き父の墓に淡き陽春彼岸

春の波裸足で遊ぶ子等の声

モノトーン写真の整理日永かな

公園のベンチに映える春日影

東京 福神 規子

子を抱いて来し聖堂の春の冷

遠のけば山菜莢の黄の酈びけり

塵取りの落花に湿りありにけり

しほらへは濁ってしまひ蝌蚪の水

どじょうこもふなつこもゑて猫柳

東京 福富 清子

雪暗の奥へ人急ぐ北の町

母校跡は城跡にしてかけるへり

墓八を出て本意無くも車輪下

朝に日けに数珠子の按配覗きをり

襦かけ袂かるきよ春裕

青森 三上 忠英

よちよちの双子姉妹や青き踏む

冴え返る朽ちたるままの開墾碑

田を植えて後継ぎなきを悔いはせず

もの芽に秘めたる力ありにけり

何一つ悔いを残さず卒業す

東京 初木 秀穂

春昼の書誦に待ちぬし古書に逢ふ

枕上おどろおどろし春の雷

桃の花活けて古雛恵つける

春眠の公会堂も老いしかな

楽を聴く昔の我と春情しむ

広島 渡辺 晋山

宮島や鹿の角落つ遊歩道

瀬戸内の河口近くに水温む

下萌やソルフエリーノの赤十字

鳥帰る影を残せし安芸路かな

啓蟄やツカ劇場へ花の道

「佳画」の亀のモデル

福富さんから預かった最初の佳画は

七分開き花一輪の自尊かな

の句に一枝の桜花が添えてありました。

ところが墨絵でほかしてある花びらが

印刷すると浮き上がってきません。そこ

で補筆をお願いしたのですが、難しいよ

うで今回の亀にさしかえられました。

お手紙によりますと、亀君のモデルは

なんと伊藤算秋先生作の硯です。使用す

るのがおそれ多く柵に飾ってあったので

すが、立派な甲羅に改めて気づきモデル

にさせていただきました。

# 医芸柳壇



青森 朝霧 朝光

眠られぬトイレとイビキ二重賣め  
官製は八ガキのほか談話台も  
禿ても割引なしの散髪屋  
將軍の頭平和の二字はなし  
北の核世界の平和敵とする

大阪 池田 白楽

温暖化親子の情は寒冷化  
温暖化人の絆は乾燥化  
お金こそ全一色唯一神  
アメリカは東岸金融 西IT  
待望の平成維新はどこ行った

千葉 たれ女<sup>ら</sup>

金メダルパリンピックがもち帰る  
児童のケンカニユース勿ぢ海を越え  
かまびすし菊のカーテン開けてより  
米国産ウルチの米菓納得し  
「国技館」の上に外の字つけたがり

東京 小南 丁字

野口さん宇宙で迎える初日の出  
塾通いこつそり絵馬に願を賭け  
春の句が「角川選」入り海渡る(注)  
朝青龍退くやむない惜しむ春  
三兄弟世界三王者あと一本

東京 田村 豊幸

義理子ヨコのふりして毎年郵送す  
浅い義理深い義理ありチヨコ値段  
極楽の君に供えるチヨコ義理でない  
本命のチヨコに二人の名を刻み  
鉄力プロ形のチヨコは大日本

群馬 豊泉 清

草食系金毛力も無い男  
外国に土儀貸し出す国技館  
楽園にテンがいてトキ哀れ  
老いたけど子が従わぬ親となり  
マグロとは魚偏に無と書くのかな

青森 三上 忠英

さくら咲くこれが見納めと思わねば  
老害と言われよつとも生きてやる  
寒い世だ何を頼りに生きていく  
返品のかかない妻に泣かされる  
尊厳を保てるうちは生きて行く

(注) 世界文化社が発行したカラー版

「俳句歳事記」の『夏の草木』百合に、  
久保田万太郎氏、松本たかし氏と並んで  
私の句  
百合に吹く風とは逆の雲よぎる  
を発見しました。しかも監修が尊敬する  
中村汀女氏、二重の喜ひでした。